

思い出すままに

*

私は一九〇五（明治三八）年四月一日、名古屋市西区裏塩町に生まれた。

この年は日露戦争の終りに近い年で、三月には奉天を占領し、五月二七・二八日は、日本海海戦で日本が勝利を得ている。

そして秋にはこの日露間の講和をめぐって、新聞社、交番、電車等の焼打ち事件が各地で起こった。

また、アメリカではIWWが創立された。清国（今の中国）の孫文らが東京で中国革命同盟会を結成したのもこの年だ。

五月一日には、日本で最初のメーデー集会である「メーデー茶話会」が平民社で催されている。一方この頃から、勃興する社会主義勢力への大がかりな弾圧が準備され、それは一九一〇年、幸徳秋水ら「無政府主義者」に対するデッチ上げによる大量投獄、社会主義者の根こそぎ検束として現われる。売文社ができたのも『白樺』が発刊されたのもこの年である。とにかく一九一〇年前後にかけて、政治も社会もすべてが動揺していた。

このような年に私は産声をあげた。そのことについて親達は、「この子は将来どんな者になるのだろうか」と話し合ったという。私が十四、五歳になった時、今池の伯父達がそう話してくれたものである――。

最初の記憶

一九一〇（明治四三）年、私がまだ五歳の春、四月末のことだった。母に連れられて鶴舞公園へ出かけた。なんでも代議士がたくさん警察へ引つ張られた事件の真相を訴える演説会があるからというので、大勢の人が鶴舞公園へ鶴舞公園へと出かけていった。

まだ五歳の私には訳もわからなかったが、公園の音楽堂を取りまく人の波にまず驚かされた。すでに幾人かの弁士は演説を終え、これから親玉の山崎というヒゲ武者の親父の演説が始まるところであった。母はよい場所に陣取り、さかんに手を叩いたり、声を上げたりしたものである。

家に帰り着くなり、私は母にその日の演説のわけを尋ねた。母は、山崎という人は小学校も卒業していない人で、現在馬車ひきをしているが、次の選挙には代議士になるに違いない人だと教えてくれた。

その晩柳橋にある名鉄の建物が焼き打ちされて多くの検束者を出した。なにしろ、このところ毎日のように、米は上がる、電車賃は上がるで、米屋の焼き打ちも始まっていたのだ。

この世相不穏は、山崎の演説のせいだということで、彼も引つ張られた。母は、山崎に罪はない、罪は政治にあるのだ、山崎は無罪だと、さかんに町内を叫んで歩いたものだ。母の影響で、私はこの頃からなんとなく政治家が嫌いになった。

この母は、私の中学五年の頃（大正十一年）町内のお日待ちをたたきつぶした人であった。お日待ちとは毎年一回、町内ごとに氏神様を祭る儀式のことをいい、その晩は男は酒盛りで夜明かしする。そのぶん、女は炊事一般、酒のかんなどで忙しい思いをする。母はこれを不当だとしたのである。

名古屋人のあいだには、例年大晦日から元旦にかけて熱田神宮に参り、神宮のカガリ火で餅を焼き、それを食べるとその年は息災延命であるというしきたりがある。一九一一（明治

四四）年の元旦、私はこの昔からのしきたりを父と共に行った。外交官の父は不在がちで、正月を父と一緒に迎えるということは三、四年に一回ぐらいであったのである。

最後に父と二人で熱田神宮へ出かけたのは、一九一七（大正六）年だった。大晦日の夜中その年は市電で行くことになり、栄町まで歩いて停留所に行ったが、電車を待つ人の列が三百メートルも続いている。私たちは電車に乗ることをあきらめ歩くことにしたが、その途中で私は父にはぐれ、泣きながら家へ帰った。心配した父はすぐ引き返してきて、再び私の手を取って歩き出した。御園町から伝馬町をすぎ、本町へ出て神宮の北口へ、あとは例年のしきたりどおりであった。帰りは船方まわりの電車で明道橋へ帰ってきた。

この年私は明倫小学校六年になった。そして、六月八日正午頃、マラソン選手として練習中に、裏塩町の坂井田のばあさんが知らせに来てくれて父の死の報に接した。享年五十歳。父は異郷で死んだ。

かくして、一九二二（大正一一）年、東京に出るまでは名古屋の母のもとで育てられた。母のもとで、とあえて書くのは、十二歳で父に死なれて以来、私を支えてくれた母の気丈さが今も心に残っているからである。

ワンバク時代

私の中学時代（一九一八～二〇年頃）は、グループではケンカをせず自分達仲間の中から一人を選びだし闘わせた。私はオッチョコチョイで、おだてられるとすぐ飛出して相手かまわずケンカをしたものである。私は小さい時からケンカ早く、メリケン杉などと呼ばれていた。

ある時、明倫中学の三年生と練兵場で決闘することとなり、その騎士^{ナイト}に私が選ばれた。我輩の慶知第一中の生徒と明倫中学の生徒達が円陣をつくり、そのど真中で二人の人間が参ったと声のかかるまで闘うのである。周囲の取巻き連は第二第三と次の選手を待機させて腕組みなどして傍観している。私は、例のとおりタオル（その当時は日本手拭）に小石を包み、手拭の石が包んでない方の端を持ちそれをぐるぐる振り廻し相手の手許へ飛びこんだ。指の間には、キコク（カラタチのこと）のトゲをはさみ、そのゲンコツで相手を倒す。その速さ一瞬の出来事であり見物人にはなにがなんだかわからない。勝敗は瞬間についてしまった。呆気にとられた敵のグループは控えの騎士を出す暇もなく降参を申し入れた。その場はそれ

で収まったが、その話を聞いた牛田という傘屋の小僧がおさまらず、十五日の休みに御園御門で決着をつけようと私の所へ使いをよこした。私は一人で、一晚作戦を練った。そしてその晩からは吹矢を竹で作ることに懸命で、勉強はほったらかしである。側で高等学校の試験勉強をしている兄は何をしているのかと一言いっただけであとは黙っていた。

牛田の小僧と闘う日がきた。私はソツと家を抜け出し急いで約束の場所、御園御門へ着いた。そこにはもう小僧が来て、喧嘩仕度で私を待っていた。立会人が一応の喧嘩ルールを話すといよいよ闘いが始められた。小僧は筒袖の着物に雪駄をはいて手には洋傘の骨ばかりを束ねたものを持っていた。合図と共に私はすかさず相手の手許へ飛びこんでメリケンを一発くらわせた。相手が眼をつむった瞬間小僧の小手を吹矢の先でチクリと突いた。相手の小僧は痛さに耐えかねたのか逃げ出してしまった。

これで闘いは終わったが、おさまらない明倫中学の生徒達の中で親に話した者があるらしくその二、三日後に私は校長室（慶知一中）に呼出された。母にも呼出しがきていたようである。母と共に登校した私は何食わぬ顔で校長の前に出た。

当時の校長は、マラソンで有名な日比野寛先生である。私はこれまで何度もこの校長から説論を受けたことがあり、どんな結果になろうと覚悟はできていた。その日の言い渡しは三

日間の停学であった。よくまあ放校にならなかったものだと思えた。そのことがあって以来、全生徒の素行はよくなった。しかし私は今更でもあるまいと相変らず喧嘩しては生傷の絶え間がなかった。それでも中学四年の三学期からは一切を忘れて勉強に専念した。お蔭で今日を迎える事ができた。

大杉栄と大震災の思い出

(1)

一九二三（大正一二）年、関東大震災の折、私は早稲田大学に入ったばかりで、猿楽町のてんぷら屋の二階に下宿していた。家主のおやじが階下から「杉藤さん昼飯だよ」と呼んだのに「はい」と答えて階段を一足降りた途端、ガラガラッと来た。不意をつかれて私は階段をまさかさまにころげ落ち、階段の下に置いてあった四斗樽の鏡をブチ抜いて酒漬けになった。私はすぐに電車道にとび出し、そこにいた三歳位の女の子を抱きあげて、上野の山をさして逃げた。上野で二晩をすごし、みなし児になった子供を連れて、東海道線の開通を待って郷里の名古屋へ無事落ちのびた次第である。

この体験は私の生涯で一番大きな出来事といえるが、まだやんちゃっ気の抜けない血氣盛りの若者には、心の底までゆさぶる程の深刻な衝撃ではなかった。衆知の通り、この震災では憲兵隊による大杉夫妻殺害事件、亀戸事件、朝鮮人の災難など、さまざまな事件が起きたが、大杉夫妻と甥の少年の死は、世間一般の同情をかい、涙をさそったものである。私も被害者に対して大いに憤慨したが、その時はまさか自分が、後日大杉を偉大な先達として、ある時は指針と仰ぐようになるうとは考えてもみなかった。

その後、私はアナキズム運動に入ることになったが、毎年九月一日、関東大震災を思い出す度に、大杉栄の死を悼むことになり、今日では未曾有の震災が大杉と自分とを結ぶ一本のキズナであったと考えたりもする。

大杉の翻訳による本、パンフをたくさん読んだ中でも、彼の法律と強権、労働運動に対する考え方には頭のさがるものがあった。感銘を受けた私は、戦後も大杉の遺児・魔子と再々逢い、思い出を語り合ったものである。

その魔子も今は亡い。

(2)

大震災の後、下宿していた家の跡に、生残った近所の人がバラックを建てはじめた。私は

その土地が自分の住んでいた所であり、持主は死んでしまったことも知っていた。しかし、私が文句を言うわけにはいかない。私はとりあえず国（名古屋）へ帰る予定だったので、子供（下宿先から連れて出るというより、とっさに抱いてにげた可愛い女の子）を抱いて歩き、何処の駅だったかおぼえていないが、とに角汽車に乗った。何時間かかっただろうか、ずい分たって、何とか小田原に着いた。

小田原から先は、線路に亀裂ができて汽車は動けぬ。仕方がないので、下着をさいて紐を作り、子供を背中に負ぶって歩き出した。海岸ぞいの難所もものは、足にまかせて線路のうえを歩いて、どのくらい来たのか見当もつかなかったが、一軒の藁屋根の家を見つけた。その家にたどり着き、事情を話して一晚とめてもらうことになった。しかし背中の子供がどうしても私の背から離れようとせず、随分と苦勞した。そのうち、その家の婆さんが見かねて子供をあやしてくれたので、ようやく背から下すことができた。

この家は藁屋根で、天井板はなく屋根裏が見える家である。屋根の藁を押さえている竹がすすけて、鉄パイプの如く見える。海岸端にある上に、天井がないので風通しがよく、暑い暑いその年の異常な暑さも、ここでは少しも感じられず、ゆっくり一晩やすんでまた歩き出した。その家で、次の駅までの道を聞いておいたので、今度は割合早く駅に着いたように思

った。駅の名もおぼえていないが、小田原からトンネルを越えたように思っている。とにかく汽車に乗れた事はうれしかった。子供は安心したのか、すやすや眠ってしまった。ぎっしりつまった超満員列車も、静岡あたりから降りる人が多くなり、ようやく腰を下ろすことができた。私も疲れていたのか、子供を膝に置いて眠ってしまった。どのくらい眠ったか自分でもわからない程、眠っていた。

名古屋へ着いた私は母と話し合い、その子を一番上の姉によって育てることになり、私は十日程たってから東京へ帰って行った。

その女の子も今では人妻となり三人の母親になっていると聞く。その子のことを思う時、当時七歳だった橘宗一君が政治権力者と結託した軍部によって殺されたことが自然心にかかれば、胸が痛くなるのである。

新聞記者となる

大学を卒業して朝日新聞記者となり、五、六年経った頃、最初の妻ハナ江と結婚した。その頃私は新聞記者の常として毎夜の帰宅が深夜一、二時過ぎになった。ハナ江の父親は鉄工

所を経営していて、彼は私のことを、家庭を顧ないだとか、女房を大切にしないとかたえず批難していた。

三歳になる女の子がハシカで亡くなったとき、これを契機に日頃の気まずさも昂じて、協議離婚した。

一九三二（昭和七）年、私は朝日新聞和歌山支局に勤めていた。その和歌山時代、市内の高松という所に、彦岐（玄海灘の彦岐島出身）という五十歳位の女の人がいた。この人は、自分一人で消費組合的なものを作り、多くの商人を敵にまわし闘っていた。今にして思えばこの人は偉大な社会主義者で世の在り方、社会の仕組み等私に説明しては、これを改革するのだと気焰をあげていた。いわば私の恩師である。

この家のある高松という町は、和歌山城から、和歌の浦へ行く間の電車の停留所である。彦岐さんは稼業として下宿屋をしていたが、誰でも入れるということではなく自分の問いに答える答え方によって下宿人をきめる変り者であった。家族は三人で、そのばあさんと二十歳前後の娘二人の計三人暮しであった。夕方訪ずれると、晩飯前には必ず一席、ばあさんの訓辞を聞かねばならなかった。下宿人は彼女のことをみなバーサンと呼びなついていた。

ある時姉娘が急に居なくなった。ばあさんの話によると、姉娘が男を欲しがって仕方がないので「そんなに男の尻を追っかけるなら女郎にでもなったらよい、女郎が如何に自由がなにか知ることができるだろう」といったものの、もし娘が家を飛び出したら如何に淋しい思いをするだろうかと一人悩み、知人に相談するべくある日家をあげた。用件を済ませて家に帰ったら、姉娘が家出したのかそこに居ないということであった。

その後私は自分の事にとりまぎれて、忘れるともなく数年経ったが、偶然その姉娘の身の上を知ることになった。

家出した時姉娘は、和歌山駅前にある桂庵（口入れ屋）を訪れていた。姉娘は真理子と呼ばれ丸顔の眉目麗わしきよき女の子であった。その真理子は桂庵の口車に乗って大阪の飛田遊廓へ身売りさせられてしまった。最初の契約では三年で五万円ということであったが、店着普段着、寝巻、夜具・布団、枕、小箱、ちり紙等思わぬ出費がかさみ前借は瞬く間に十万円をこえた。その結果三年が五年となり七年となって泥水稼業が身についてしまい、青春はまたたく間に消えてしまった。挙句の果ては、ヤクザのボスにひかされて、田舎の売春宿へ売られてしまった。その宿へ泊りに来た土建屋の青年に過去を寝物語に聞かせたところ、その青年がこのことを親方に話し、その親方の助けて青年と真理子の二人は広島へ逃げてしまっ

た。

広島へ落ちのびた二人は暫くそこで生活していたが、だんだん西へ西へと行って、遂に鹿児島まで落ちのびていった。その間何をしていたかもわからない。私があったのは一九四八年、戦争も終り漸く人らしき生活が社会に蘇がえってきた頃である。九州の炭坑にいた私が賃金問題で上京し、その帰途、母の家へ寄って母からその話を聞き驚いて、真理子の居るという京都に立寄った。お寺の一角を借りて住んでいた真理子を見たが、その後どうなったか私は上京してしまったので不明である。壱岐さんも墓の中で泣いていることだろうと時々思う。下の娘もどこかで生きて居る事であろうが、とんと消息もなくわからない。壱岐さんの社会主義も一代でついえたのである。

名古屋時代——応召と帰還

私は一九三七（昭和一二）年応召し、内地や朝鮮の兵営で過ごした。そして一九四一（昭和一六）年春には、北支那にいた。ある時そこで部隊は八路軍の闇討ちをうけ、私は左足指を怪我した。後方の野戦病院へ担がれたが、予想以上の怪我で、内地の病院へ輸送される

ことになった。

毛布にくるまっつの、長い長い旅がつづいて、ようやく大阪の港へ着いた。

私の所属は、名古屋の第三師団である。大阪の港から東海道を經て、名古屋の衛戍病院へ運ばれたのは、五月二十三日夜だった。

病院を十日あまりで一時帰休を申し渡され、母の家へ帰った。

母の語るところによると、私の留守中に、和歌山の実家へ帰るからと言い残して、妻ハナは出て行ったらしい。私は自分の家に帰ってみて驚いた。家の中にはホウキ一本が残っているだけで、私の洋服はじめ家具一切、壁掛けまで無くなっている。残っているものは、先に書いたとおり、ホウキ一本だけである。近所の人にたずねてみたら、私の妻は道具一切を道具屋に売りどし、トランクを持って、背にリュックサックを担ぎ、隣近所へ挨拶をして、和歌山へ旅立ったのだという。

私はとりあえず和歌山へ電報を打ったが、所在不明という付箋がはられ返ってきた。私はもう一度電報を打った。今度は返信付きで。しかしそれにも付箋がついて返ってきた。私はこの電報を持って母の家に行った。母が私にこのように言っただけで、なぐさめてくれた。

「どうせ、お前が戦死でもして帰って来ないだろうと思い、里へ帰って行ったのではない

か。それにしても、電報が返ってくるところを見れば、もう和歌山には居ないかも知れない。一度、太郎の転校先の学校へ問い合わせてみたらどうか」

なるほど、それに気づかなかった私の、あわてぶりに我れながらあきれながら、息子太郎の転校先、和歌山市立湊南小学校へ問合せてみた。すると七日程経ってから、学校長から返事が来た。それによると、広島へ転校した、とあった。ともかく母と相談し、当分母の家に居候することになった。

朝日の本社から、完全に足が直るまで名古屋支局勤務とするから、時々顔を出すように言っただけだ。私はすぐ支局へ行き、支局長の了解を得て、当分ぶらぶらすることになった。

そんなわけで、毎日私は酒と女に明け暮れていた。たまたま大池町の酒場で、早川という小児科の医師と心安くなって、毎日のように二人で酒場を漁り歩いた。

ある土曜日の午後、早川からメッセンジャーボーイが来た。私に早川医院にすぐに来てくれるようにとのことで、鶴舞公園際の早川宅へ行った。

受付の看護婦に私の名刺を通すと、早川の奥さんが出て来て、私を奥の部屋に案内し、いま早川は近くへ往診に出ているからと言った。三十分ほど待っていたら帰ってきた。早川は

ちょっと外へ出て話そうと、私を家から連れ出した。

馴染の芳子のところへでも行って飲みながら話そうということで、二人は珍しく電車で今池の芳子を訪れた。私達はいつも自転車が常用だったが、その日に限って電車で行った。

芳子の家は、こじんまりした料理屋で、専ら焼鳥を肴に飲ませた。女の姉妹二人が経営者で、芳子だけがその雇われ女であった。芳子をふくめて三人の女達はよく飲み、よく歌った。その日もまたたく間に、十本の銚子は空になってしまった。彼女等は飲むことにおいて何だか憂さばらしをしているように見えた。

早川は私に何か頼みたいことがあると言っていたが、酔いつぶれてしまい、その日は何も話ができず、車で送りとどけ、私も母の家に帰った。しかし早川のことが気になり、なかなか寝付かれなかった。

三日ほどたって、夕方私は早川医院を訪れたが、早川は往診から帰っていないかった。

妻君の話によると、猛烈な恋愛結婚だったそうだ。親の反対を押し切って二人は結ばれた仲であった。彼女は有名な画家の娘で、最近になってその両親が亡くなり、遺産を分けるのにゴタゴタしているという。姉妹は女ばかり三人で、早川の妻君は、一番末っ子らしい。遺言ではその末っ子に全財産をやるように書いてあるらしいが、その遺言書を姉娘が握りつぶし

た形跡があると、中の姉が伝えてきたということであった。

相談というのは、如何にして姉の持っている遺言書を取り上げることができるか、誰かくわしくわかる人に頼んでほしいという。妻君が頼むので私も引受けざるを得なかった。

私は翌日支局へ行つて、その事を支局長に話した。そして社の顧問弁護士に、よい智恵を借りることにした。弁護士の話では、結局、告訴するより手はないことがわかった。私は早川夫妻にそのことを話した。

それから三日目、留守中に早川から手紙が来た。一切私にまかすから弁護士に頼んでくれと書いてあった。私はその手紙を持って弁護士のところへ行つた。弁護士は即答をさせ、ゆっくり考えた上どういう方法をとったらよいかきめて返事をするといった。

翌日、社へ出たら弁護士がすぐ来いというので、弁護士宅へ足を運んだ。

そこで私の目の前に出されたものは、なんとその問題の遺言書であった。経緯を聞くと、弁護士一人で早川の妻の姉の所へ昨夜行き、いろいろ世間話をしている間に、遺言書のこと及び、姉が、自分が悪かったとその遺言書を弁護士に渡し、妹（早川の妻）へ渡してほしいと頼んだらしい。

これでこの件は日ならずして片付き、気持ちよくまた酒を飲むことができるようになった。

た。しかしそれも束の間、ここに一つの問題が起きた。

逃避行

一九四一（昭和一九）年六月ごろのことである。私の部下の南操という青年が、チンピラとけんかをして相手に怪我をさせ、新栄警察へ引張られた。

その頃、私が中心になって、五、六人で社会思想の研究会をやっていたが、南の逮捕でそれが警察に知れたものか、メンバーは次々に引っぱられ、私もあぶなくなった。

それやこれや支局長のはからいで、私は旅回りになることになった。デスクの太田が私との連絡を受持つこととし、私はすぐ新聞社の車で、関西線の長島へまず落ちのびた。そこから四日市、亀山で乗り替え、津、松坂を経て、尾鷲で下車。当時は、ここまでより汽車は行かず、あとはバスが唯一の足であった。しかし、田舎のことでバスに乗れば目立つ。私は歩くことにした。

新聞社で用意したリュックの中には、針、糸、ヨーヨーなど小物が詰められていた。行商人と見せかけるには、先ず服装から準備せねばならず、これら一切は社のベテランが整えて

くれたものだった。それほど当時はジャーナリストも苦勞をしたものだった。

尾鷲から勝浦へ出るには、どうしても山越えをするより外に道はない。舟はあっても、名代の難所で、小さな舟ではこの怒濤は乗り切れない。だとしたら山路を歩くより手はない。村人の話では、この山越えて年に二、三人は熊にやられるということだった。

しかし警察につかまれば一、二年は取調べもなくブタ箱へ放りこまれることが、目に見えている。私は山越えを決心し歩き出した。一メートルほどのヨーヨーの紐をもつれさせないように気を配りながら、歌をうたい周囲に目を配り歩く姿は、如何にも落人の感じである。幸い熊にも出合わず、熊野灘を眼下に見下して本宮にたどり着いた時は、身も心も疲れ果てていた。

本宮で田舎家にひろわれて、三日程やっかいを掛けた。さらに新宮へ下り、新宮の漁師の家に落付いた。ここで私の指先の器用さが物の役に立って、また四、五日すごした。指先の器用さとは、私は小さい時から竹で編棒を作り、網を編むことが出来たのだ。そこで、漁師の網のつくりを手伝って大へん喜ばれたことなど、今思い出してもほくそ笑まざるを得ない。

四、五日はまたたく間に過ぎてしまつて、いよいよ新宮を出ようとしていたら、地元の警

察から呼出しが来た。ここで捕まっては困るので、一晩かかって長い手紙を書き上げ、その家に別れをつけようとした。するとその親父が「警察の方は私がうまく話をつける。私の妹の家がこの上の方にある。そこにはめったに人は寄りつかないから、自分そこですごしたらよい」という。連れられてそこへ行くと、なるほど人のよりつけそうな山の中のあばら家で、炭焼を本業とする三人家族の家だった。私がそこに居るうち、例の漁師がどのように警察に話をしたかわからないが、呼出しも詮索も立消えた。

しかしその後が大変だった。その漁師は名を新宮寺といい、この辺での大地主とのことだ。私のどこにほれ込んだのか、真剣になって私を新宮寺家の養子に迎えようとしていた。

私は自分の過去および家族のことなどすべてを話し、あきらめてもらうよう計ったが、それも無駄だった。そうこうするうちに、十日ほどたった。その間に何度逃げ出そうとしても周囲の見張りが厳重で、夜も昼も逃げ出すわけにはいかない。

それから三日後、久しぶりに新宮寺がやって来た。

「名古屋の母にも会い、新宮寺家の養子にすることの了解を得た。また新聞社でも、編集長はそれほど君（新宮寺）が養子にほしいなら、本人を納得させることだ。それまで通信部として籍を置いておく。その旨伝えてください」ということであつたという。

ここまでつくしてくれた新宮寺に申訳けないので、度胸をすえて当分ここに落付くことにした。もっとも養子縁組の話は、すぐというわけにもいかないので、一カ月の期間の猶予をもらうことになった。

その間に、ハナとの離婚裁判が成立、これではじめて縁組もできることになった。が、杉藤の姓をすてるにはわだかまりがあり、そのことについて新宮寺と話合ったあげく、彼はそれでもよいということで同意。遂に結婚式を十一月三日、昔の明治節に熊野神社で行うことになった。その日から、私の身の回りは、数人の若い漁夫が守ってくれるようになった。

十一月三日、新しい妻を娶って新婚旅行に出た。和歌山県の白浜温泉から大阪へ船で渡り大阪の本社へ立ち寄り、編集員一同から祝を受けた。京都見物のあと奈良の橿原神宮に参り近鉄で宇治山田を経て義理をすませ、名古屋へ舞いもどった。とたんに待ちかまえていた警察が私をあっけなく検束。新婚旅行の終り近く、新妻は泣く泣く一人淋しく国へ帰って行くという結末になったのである。

一方、私は二十七日の拘留を解かれて、新聞社へ顔を出した。先輩諸君は「迷惑なことだった。長いものには巻かれろで致し方もない。しかし、この事は君の体験記を書く上に最も大切なことであるから、ひまを見ては綴って置くがよいだろう。記録は社で保管してやる」

といって、ねぎらいの金一封をくれたが、私にはどうしても割切れないものが残った。それからはもう誰も信用できなくなり、私はやけ半分で酒と女に身を持ちくずしてしまった。

開 戦

二十七日のブタバコ生活を終り、娑婆へ出たのは暮もせまった十二月初めであった。まず母の家にかえって、母がわかしてくれたお湯で行水をして浴衣に着替えたら、ようやく人間らしさを取り戻した。

翌日、昼近く支局を訪れて相談した結果、県政記者を勤めることにきまり、その日から県の記者クラブへ顔を出した。意地悪そうな毎日の伊藤、お人好しそうな新愛知の鈴木などをはじめ、全部で七人、物珍らしげに私をむかえた。一応のしきたりどおり、栄町のブラジルでコーヒーをおごり、県政記者の仲間入りをした。その日は前に記した早川の家へ久しぶりの挨拶にまわった。幸い早川も家にいたので、早速芳子のところへ飲みに行った。そして芳子の家で二人は時局のこと、軍部のことについて議論をした。

その翌日、朝早く支局からの呼出しで、日本軍がハワイ島真珠湾に不意打ちをかけたことを知った。とりあえず参謀本部の発表を書く以外に記事はない。しかし私は書きたくなかった。記事は岡田という若造にまかせ、私はデスクの方へまわった。当時は軍部の検閲がきびしく、勝った勝ったという戦勝記事以外はみな没にされてしまう。これでは記者も書く気にはならない。私も退屈でしかなかった。

ラジオ、電波など、およそ外国からの通信はいっさい軍部によって監督され、一般の人には世界の動き、日本に対する批判など知りようがなかった。国民はただ戦勝に酔っていた。編集は我が軍に都合のよいものに書き替えられた。だから当時発表された大本営発表は、まゆつばものであった。それでも私たちは目をつぶっていなければならなかったのだ。一言でも逆らおうものなら、拘禁であり、お互いに沈黙をつづけるより方法はなかった。せめてもの憂き晴しは、軍部の酒をうまくだまし取る（ある時、少佐をだまして、酒を三升ほど持出し、芳子の家に運んだことがある）ことだった。

芳子のこと

一九四二（昭和一七）年春、芳子のつとめていた酒場は廃業することになって、彼女は千

種にある陸軍砲兵工廠に働くことになった。

当時、芳子は親の家から通っていた。家は親夫婦と妹達四人、計七人暮しである。母親は芳子連れ西田に再婚し、その後生れた子は全部女の子であった。その妹達も大きくなり、一番末の子を残してあとはそれぞれ仕事についた。西田の家は生活にも困らず、呑気に暮していた。母親は内職をしているが、親父はまい日左団扇で酒ばかり飲んでた。政治家と自称していたが、もっぱら略専門であった。要領のよい男で官憲には評判がよかった。

さて、芳子の話だが、彼女は結婚して十日足らずで夫を戦地にとられ、淋しい日が三年も続いている。誘惑に簡単に乗る気持ちは無理からぬことだと誰もが思っていた。その芳子が私のどこに惚れこんだのかわからないが、それは私のためにつくしてくれた。砲兵工廠へ働き出してから一カ月程たった頃、朝日の支局へ電話がかかり、私が不在だったので、言伝てが机の上に書き置かれてあった。

『今日、社の仕事が終わったら、西田の家へ来るように』

私は社から出て西田の家へ急いだ。その家の表戸を開けると、幅三尺程の通し庭が裏口まで続いている。部屋は二間で、六畳と八畳、六畳の間が親夫婦の部屋、残る八畳が娘五人の起居する所である。

私がこの家を訪れたのは、夕方の六時頃であった。ちょうど食事時で、父親をはさんで四人の娘が食事をしてた。勿論、父親は上の蘭子を相手にチビチビ飲んでた。そこへ私が顔を出したので、みんなの態度はいっぺんに変わった。庭に居た母親が「芳子、芳子」と叫び裏の方へ走っていき、食卓を囲んでいた五人は、起つもの次の間に行くもの、バラバラになった。

私は急いでこれを止めようと声をかけた。「とんだ所へお邪魔してすみません。どうかお気を悪くせず済ませてください。私はみなさんのお食事がすむまで、外に出て待っていますから」

私が外にとび出そうとすると、奥から芳子が、眼の色も変るような思いをにじませて、小走りにやってきた。そして、西田が私に会いたいといったので、新聞社へ電話したと言う。そんな立話をしている所へ、二番目の妹高子が来て、芳子に何事か耳打ちした。

芳子と共に家の中に入って、私は親父の前に座り、挨拶を交してから、すぐ酒盛りとなった。芳子の両親と妹達との歓談は夜十時頃まで続いた。その晩は西田の家でみんな雑魚寝することになり、私は一番端に寝かされた。

翌朝早く西田はどこかへ出て行った。朝食を食べ、私はそこから社へ出勤した。

二、三日たって、芳子から電話があった。

千種区仲田通りで家を見つけ、二階建の六畳一間を借りたとのことであった。家の持主は東春日井郡の金持であった。借り主は、関戸銀行に長年勤めていたオールドミスであったが数年前その男と知り合ってから銀行を辞め、彼女は彼の妾になっていた。金にあかして造った家はいたれりつくせりで、当時としてはまれな明るい電光を配置したモダンなものであった。二階の一間一間に洗面所とトイレがついていた。

芳子が最初の借り手で、炊事に必要なものは全部貸し与えてくれたと言っていた。私は何と奇特な人もあればあるものだと感心した。その日から、その六畳の間で二人の生活がはじまった。朝起きると、二人は近くの一膳めし屋へ行き、食事をすませ、各々の職場へ通った。帰りはバラバラで私はたいいてい夜の十時頃になる。その間、芳子は一人床の中で眠っていた。

不思議なことにその家は、風呂場だけは誰れにも使わせなかった。私たちは時々、風呂場に秘密が隠されているかのようにいったものである。ある時、例の如く夜十時頃一杯機嫌で鮎の折をさげて帰ってくると、芳子が待ちかねたようにとびついてきて、首につかまり耳許へ口を寄せてささやくのであった。それは、この家の親父がきて、風呂場の中で女（多分妾

だろう）と奇声を放ち、長い時間湯殿に入っただけだというのである。私は人の事にヤキモキするな、と言いついて床の中にもぐりこんだ。

こんな生活が二カ月程も続いたある日、私の母が訪ねてきた。そこではじめて芳子を母に紹介し、諒解を求めた。それ以後、私は芳子とおおっぴらに同棲することになった。